

## 農業者の理解と互いの信頼関係が 利用者本人の能力と可能性を引き出す

「益子まちづくり株式会社 友愛作業所（益子町）」

およそ30年前、地域住民が立ち上げた小規模作業所を前身とする友愛作業所は、平成19年1月に益子まちづくり株式会社が運営主体となり、新たなスタートを切りました。現在は障害者就労継続B型指定事業所として、地域で暮らす利用者たちの生活・就労支援を行っています。

同作業所は以前から菓子やパンの製造販売に力を入れ、「益子友愛洋菓子店」や「ごぶたのパン



▲ 友愛作業所のサービス管理責任者を務める池田誠さん

屋さん」として知られています。

その他にも印刷、リサイクル事業、各種下請け作業など提供できるサービスは多岐にわたります。

今年5月、とちぎセルブセンタールからの提案をきっかけに農福連携に本格的に取り組むようになりましたが、それ以前にも県農



▲ ネギ農家の除草作業の様子。薬剤等が使えない株間の雑草をていねいに抜く

政部が主催する「ユニバーサル農業研究サークル」に積極的に参加するなど、かねてより福祉分野と農業分野の連携を模索していたといえます。同作業所の池田誠さんはこう話します。

「数年前より近隣農家から農地を借り受け、利用者とともに実験的に野菜づくりに取り組んでいたこともあり、農福連携事業にはすんなり取り組みました」

現在請け負っているのは真岡市のネギ農家の除草作業です。週1回のペースで1日2時間、3〜4人の利用者（全員20歳代の男性）が株間の雑草を1本1本ていねいに除草します。

農業指導員として同行する池田さんの管理の下、仕事のていねいさは畑の持ち主にも好評とか。感謝の声が利用者へ届き、それを聞いた利用者はかぜんやる気を発揮するなど、互いの信頼関係が好循環を生んでいるそうです。

「どちらかと言えば、農福連携の取り組みは工賃の向上に重きが



▲ 友愛作業所は廃校になった旧大羽小学校の校舎を利用



置かれがちですが、それにも増して利用者自身が他者から必要とされ、期待されることの方が社会参加を促す意味でも大きいと思います。除草作業に従事する利用者には全員が週1回の作業を楽しみにするなど、人との出会いやつながりが本人のやる気を引き出し、可能性を伸ばすことを実感しました」（池田さん）

## 利用者個人の性格や能力を考慮した 適材適所の人員配置が作業の要

「社会福祉法人 飛山の里福祉会 ハート飛山(宇都宮市)」

宇都宮市の東部、飛山城址のほど近くにある「ハート飛山」は、障害者就労継続B型指定事業所として利用者に働く場を提供するとともに、一人ひとりのニーズに合わせた個別支援を行っていきます。



▲ハート飛山のサービス管理責任者を務める仲山奉幸さん

一級河川・鬼怒川沿いの平坦かつ広大なエリアは、都市近郊農業地域として農業が盛んで、同施設ではかねてよりシイタケの菌床栽培や花苗の栽培に取り組んできました。



▲梨の収穫用コンテナを洗浄する利用者たち

した。その他にも地元農家に出向いて農作業を手伝ったり、直売所と協力して出荷する野菜の袋詰め作業を行ってきました。言うなれば「農福連携」という言葉が一般的になる以前から取り組んできた先駆的事业所の一つです。

作業の一環として農作業に重き

を置くようになったのは、地元果樹園の経営者との出会いでした。障害者支援に理解の深い経営者と同事業所の施設長が知り合いだったことから、せん定した梨の枝拾いを手はじめに、さまざまな農作業を手伝うようになったといえます。

現在は氷室地区や上籠谷地区など近隣エリア6軒の農家と契約し、果樹栽培や野菜づくりを手伝っています。

農作業にあたる利用者は18〜65歳までの男性12名。平日はほぼ毎日、午前10時〜正午と午後1時〜3時までの計4時間、2班に分かれて除草や枝拾い、収穫や清掃などの作業に従事します。

農業指導員として現場に同行する仲山奉幸さんはこう話します。

「6軒とも大規模農家で年間を通して作業ニーズがあります。冬の農閑期でも、雨の日でもハウス内で作業ができます」

ていねいな仕事は農家からの評



▲ハート飛山の建物外観

価も高く、年間を通して仕事は途切れないのですが、そこには現場を管理する農業指導員の配慮が大きく影響していました。特に利用者個人の性格や能力を考慮し、作業内容とくにマッチングさせるのがポイントとか。同時に、現場に赴く利用者のチーム編成や人員配置も作業効率や精度を左右するそうです。

農家からの評価も高い、ていねいな作業の背景には、利用者の能力を存分に引き出す適材適所の工夫がありました。